

「演劇的な生涯を持った人」

増山雄三

「船弁慶」に出てくる大物ノ浦とは、かつて尼崎の工業地帯で、とてもここが昔の白砂青松の、景勝の浜だったとは想像できないとはいえ、昔といってもほんの半世紀ぐらい前までは、まだ少しは名残があり、元の兵庫県知事坂本勝は、この地の生まれだった。

それで、ここから義経主従が落ちていったことは、どうやら確からしいが、少なくとも室町時代、「義経紀」という語り物が成立するころ、前後の史実がどうであれ、そう信じられていたが、義経の人氣が高まるのもそれ以降で、これまた「能」のお蔭でもある。

義経はこの浦から船出した時、逆風に吹き戻され、その逆風の波間から、「平知盛」を喚きださせたのは、この能を作った観世小次郎の天才的創作だが、その二人が出てくるの

は、その頃の人気とは無縁であるまい。

平知盛は、平家方でも出色の人材で、艦隊司令として頽勢を戻そうとしたが、壇ノ浦での敗色が濃くなった時に御座船へ登り、自ら船内を掃き清め、泣き叫ぶ女房たちに、「東男にまみえることだけのことではないか」といって、叔父の敦盛と共に自刃するのだ。

そして、知盛の果しえなかつた恨みが怨霊となつて、この能の波間にあらわれ、義経に打ちかかろうとするのだが、それは、知盛のイメージが人々の間に鮮明にあつたこの時代では、よほど面白い劇能だつたと思われる。

また、一方の義経と言う人物も、日本史上で最初に現れた軍事的天才で、彼が平家に対して行なつた軍事活動は、魔術的成功をおさめたため、法皇はじめとして、貴賤諸とも彼に夢中になつた凄まじさが、鎌倉の源頼朝に對して、政治的危機感をもたらせた。

それで、頼朝は義経を無理やりに追放し、遂には殺してしまつたのは、頼朝の自衛措置

に他ならないが、彼にそこまで異常な行動を取らせたのは、当時、都における義経人気の大きさを、知らねば考えられない。

私はいま、義経ゆかりの、須磨の一ノ谷に近い所に住んでいる事もあり、彼の事には興味があるが、それとともに、透明度の高い彼の少年期の伝記を、牛若丸と似たような時期に、読んだりした事からなのだろう。

また、多くの日本人にとって、義経は実在した人物であり、しかも彼の存在と活躍は、日本史が一変しようとする変動期に、様々な作用と反作用を与えているが、つまり、鎌倉幕府の成立は、彼の存在なしには、あり得なかったものでもある。

そしてこの幕府は、それまでの京都支配による、不合理な土地制度に対して、徹底的なリアリズムによる、合理化が遂げられという革命とはいえ、それだけでは何の面白みがない所へ、義経が登場する事によって、華麗な演劇性を帯びるものになったのである。

ただ、ここで言うっておかねばならないのは、義経が存在しなくても、歴史は今の様に進行したはずで、彼は実在しつつも、多分に芸能的な人物のような存在であって、政治史とは一切関係なく、「あの時、義経が兄の頼朝に代わって、鎌倉幕府を主宰していたら」などとは、一切考えられないのである。

それは頼朝こそ、鎌倉の名で象徴される、革命の推進者であった事は、誰もが認めているので、もし、義経に鎌倉幕府などを主宰させれば、日本史はその時点で、滅茶苦茶になつたに違いないと思つてはいえ、それでも後世の我々は、義経が可愛いのである。

それで、いささか小堅くいえば、奈良朝以来、農民を苦しめ続けた、京都市的な律令体制を守る、宮廷勢力最後の元締めが「平家」だつたが、それを、本来は流人に過ぎなかつた「源氏」が結集し、国法擁護のバケモノと化した、その平家を倒したのである。

それで頼朝は、総帥であつても個人的兵力

はなく、出兵した殆どは、北条氏以下の豪族だったのだ、もし平家打倒が成功しても、その成果は彼になく、栄誉と栄職しかないという歴史的役割を、よく認識していた。

が、義経は、頼朝のそのような立場を殆ど理解せず、勃興しつつある状況についても、把握する事がなく、また頼朝に対しても、自分が弟であるという血縁でしか捉えていなかっただので、頼朝や板東武者たちにしても、それは苦々しい事だったに違いない。

つまり義経は、頼朝《王朝》の一員と思っていたが、現実には頼朝は個人でしかなく、その実質は、彼を担いだ北条氏である事を分っていた上、冷酷な性格の持ち主だった事もあり、義経に対して、「弟と思わず、ただの家人であると思え」と悟らせたかったらしいが、義経はそれを悟らなかつた。

その後、義経は頼朝の代官として出征し、次々に大功をたて凱旋するが、底意地の悪い頼朝は、彼への恩賞を沙汰しなかつたので、

ここから、強き者は驕るべからずという「判官びいき」、という言葉が生まれてきた。ただ弱者の義経は無思慮で、頼朝と義経の間を裂こうとした後白河法皇により、頼朝の介在せぬ官職を受けたのは、鎌倉幕府に対する決定的な裏切りになるが、鈍感な義経はそれが裏切りなどとはつゆ思わず、以降、義経の転落が始まっていくのである。

ともかくも、義経ほど「演劇的な生涯を持った人」はまずいないが、その要素の一つは彼が軍事的天才だった事で、そのような才能を持つのは、千年に一人くらいなもので、その最初の人が義経であり、彼は奇襲を使う事により、合戦の様式を変えてしまったのだ。

それでも、義経は小男で美男でもなかったが、京の公家たちは、荒々しい板東武者に比べれば、ちよっぴりは京風だと誉め、さらには、多くの甲冑を用意し、合戦毎にお色直しをした点も、演劇的であるといった。

さらには、義経の恋人に、当代随一の白拍

